

## 物

と

## 心

(承前)

山田次郎

そこで、一般に經驗的外界物の具體的存立に豫想せられる感覺的性質(相異性)のそれ自身更に豫想するところのものとしての或る神經過程の(超經驗的延長段階の)所謂自體的本質が、そのやうにもはや何らかの外界的空間的形象を以てそれに擬することを到底許さないものであるとするならば、その自體的本質は結局廣く經驗的乃至想像的な具體性といふものに關しあくまで唯否定的にのみ考へらるべきなのであらうか、それとも又、右に代るべき何らか他の積極的な考へ方が見出され得るでもあらうか。

ここで我々はもう一度、一般に理解知の追求するところのものとしての所謂實在云ひ換へれば現象の背後なるもの乃至現はれるもの、の形式的本質が何であつたかといふことを思ひ返してみよう。既に述べた如くそれは畢竟——その想像的具體性さへ實は暗に或る意味的關係の含蓄に即して成り立ちつつ——何らか直接に現前なるもの云ひ換へれば心的なるものの時間的に異質的な非合理的關係に於ける或る法則性(形式的自己保持性)そのものとして、元來その心に直接的な所謂現象態に基きつつ而も一旦成立しては却つてその直接態の時間的異質的生起をばその背後の間接的立場からして所謂合理化し説明する所のものであつた。現はれるものは、その存立によつて、現はれを説明するものに外ならぬ。云ひ換へれば、理解知が物の本質を追求して所謂自體にまでも迫らうとするといふことは畢竟、それが

或る直接の經驗的現象態に關する所謂合理化をばその眞の完結態にまで齎らさうとするといふことに外ならぬのである。

かやうに考へてみれば、物の所謂自體云ひ換へればその窮極の實在的本質が、經驗的な理解にとつて結局あくまで不可到達的な或るものとして残らざるを得ないことも當然であり（個の窮極的闡明は全體の窮極的闡明でなければならぬ）、感覺的性質（相異）間の或る關係を以てその本質とする經驗的外界物がその經驗的自然態の背後にまで徹して内容を暴かれると考へられる時、そのやうな分析的追求の深徹の度に從つてその經驗的現象態は愈々深く且廣範圍に互つて説明し得られるものとなり乍ら、而もその追究は結局その外界物の所謂自體に於ける關係の無限的可能性に關して原理的に制限をもち、その事の意識は又おのづから既に把握された限りの物の本質に關する理解の根本的に免れ難い蓋然性（主觀的現象性）の意識となつて反映するといふことも、眞の具體的全體が本性上合理化の完結を拒むものであることに即して固より當然と考へられるが、唯その際、所謂自體としての合理化の完結への否定が特に右の如き所謂關係の汲み盡し切れぬ可能といふ形をとつてあらはれてゐるといふことは、偶々、この場合の（行動的意欲に關係する）合理化の要求が、おのづから感覺的性質間の或る關係に關する法則性といふ形をとつてゐることの、實は當然の反映であるに過ぎないといふことが考へられるのである。

さうならば今そのやうな經驗的外界物の理解（に於ける具體的存立）の豫想してゐる感覺的性質そのものの直接態に關しても亦それを説明すべき「もの」が求められ、而もそれはもはや身體外部的に行動に關する或る意味的指示の含蓄に即して存立する何物かではなくして、却つてそのやうな（外界性のそれによつて成り立つ）行動的體驗を構成する

ものとしての感覺的性質そのものに關してゐる意味に於いてあくまで身體内部的な而も所謂生理學的に經驗的な(觀察的行動を豫想する)追究からは原理的に逃れ出る如き或るものとして(觀察的行動の構成要素そのものに關してゐる故)、その自體的本質が上に述べた如くもはや何らかの外界的空間的形象に於いての想像を許さぬと考へられることは、もともと原理的に一なる所謂合理化完結への根本的制限が、偶、ここにはその合理化が行動を介して外界的である所の物の豫想する所のもの自身に關してゐるといふ事情に基いて、おのづからさういふ形をとつたに過ぎないとも考へられる。

云ひ換へれば、空間性は本來意味的關係に於いて成り立つものであり、外界物に關してそのやうな意味的關係が無限的であるといふことは——意味的關係の連帶性を考慮して——有限的に把握された限りの意味的關係の知としての或る不完全性(蓋然性)を意味するに外ならず、そこには既に物の本質をそのやうな意味的關係に於いて空間的にのみ考へよう(考へ盡さう)とする考へ方そのものへの或る否定乃至保留をも暗に含んでゐたと云はなければならぬのであるが、それが尙差當り單に消極的であつたのが、偶、ここにそのやうな外界物の意味的構成自身によつて豫想せられるものとしての神經過程の所謂自體の本質に關して、それがおのづから或る積極性を帯びて來たといふ風に考へることができるのである。

事情が果して右の如くであるとすると、感覺的心的内容との直接表裏といふ如き關係に於いて漠然と考へられるかの大脳皮質的な物の所謂窮極態も、實は右の如き一般的な合理化完結への原理的制限がそこに唯或る特種の形式をとつたに過ぎないと考へられるものとしては、結局やはりあくまで否定的乃至保留的たる外ないのがその本性と考へら

れ、従つて亦所謂物心兩態の窮極的直接關係なるものも當然その具體的真相は永久に蔽ひ隠されてゐるといふ外ないことなるわけである。

併し乍ら尙考へてみるのに、物の存在が元來生の心的直接態に關する行動的意欲と關係的な合理化の要求に沿ふものであり、その自體が結局あらゆる具體的規定に對して否定的に保留される外ない所以は右によつてよく解るとしても、凡そ何らかの感覺的性質そのもの（その單獨な心的直接態）に關するとしての所謂合理化従つて又その物的背後乃至基礎の想定といふことは一體意味を成すことなのであらうか——と云ふのは外でもない。（現實的）感覺的性質と（可能的）感覺的性質との間に於ける行動を介する所謂豫約的關係に關しては、その間の法則性が何らかの外界物として意味的に（背後の間接的に）集約し統一せられることにより、以後この物の行動的處理に關して或る「見通し」が成り立ち、理解に於いて生ずる生の安堵感は畢竟それであつて、所謂合理化がここに十分その意味をもつてゐることは明らかであるが、之に反してそのやうに行動的體驗を條件に相關係するとしての感覺的性質そのもの（意味的な外化乃至物化を構成する所の當のもの）についてまで、それを所謂合理化すべき役割に於いてその背後に別に何らかの物が想定せられなければならぬ理由が果してあるであらうか。

一體我々が所謂生理學的心理學的に、感覺的心的内容に關する直接の物的基礎といふものを求めて、結局それを（漠然乍ら）或る種の所謂大脳皮質的神經過程といふものに於いて見出すと考へるのは何故であるかと云ふに、それは外でもなく、外界的に經驗的な（而もその限りに於ける）この種の身體的物的事象に關して、可能的な外界の行動的規制によるその變化と或る感覺的性質の（非空間的心的）出現並びに變様との間の恒常的な結合關係が比較的にも精密

と考へられ、その法則的關係を追究し闡明してゆくことは、結局そのやうな經驗的外界物(生理的事象)を通じての感覺的的内容に對する可能的な任意の行動的規制に資することであつて、而も行動的に任意に實現してみせることのできる變化はともかくも一應説明(自己化)せられた變化と謂ふべきなのであるからである。かくて感覺的性質の心的直接態に對する所謂物的基礎の想定は結局やはりその直接的内容に關する或る説明乃至合理化であること明らかであるが、併しその説明乃至合理化といふのは要するに、感覺的的内容の或る變化(端的な性質的統一態でなく)が、それに對して恒常的條件たる一種の外界的經驗的事象(としての或る生理的過程)の變化の物的に安定的な法則性(未來への自己保持的期待)の立場から、所謂當然として豫期せられる如きものであると考へられるところに成り立つて居り、従つてそれは決して何らかの感覺的性質のものについてではなく却つてその或る時間的關係(の可能的な行動的規制)にのみ關して成り立つてゐるのである。元來或る性質が他の性質に變る(といふ時間的關係)については、後者の出現は前者の自然的な自己保持的傾向を破るものであり、その破壊におのづから補償の求められるのが「何故」であり、それに對して所謂物的基礎の或る變化が、かねて安定的な或る法則的同一(自己保持)性の立場をそこに却つて新に發揮してくる(その妥當性をあらためて實證する)のが、その補償であり「説明」である。併し之に反して或る性質の端的な(前後とのそのやうな時間的關係を離れた)「かくある」については、それはそのままに絶對的であり自然であるといふ外なく、「何故かくあるか」従つて又所謂物的基礎よりするその説明といふことは意味を成さぬと考へられる。而も我々は、そのやうな端的な性質的統一態そのもの(その單なる意識態)に關しても亦、暗に何らかの物的相應者を、何らかの外界的空間的形象に於いて、想像しようとする一種の自然(科學)的傾向をもつと考へ

られるが、それは一體何故であらうか。

凡そ何らかの感覺的性質の(心的)變化に對し恒常的にその條件たるものとしての(物的)變化に於いて外界の經驗的に扱はれ得る限りに於ける生理的事象については、所謂物的基礎としての其の想定に明かに右に述べられた如き合理的意義の含まれてゐることをみるのであるが、そのやうな(想定理由をもつ)生理的物的事象といふものは實はそれ自身のその外界の經驗的な具體的規定といふものを本來既に何らかの感覺的性質を通じて(その意味的な關係に於いて)はじめて得てゐるのであり、従つてそれはその經驗的具體性に於いて、他の或る特定の感覺的性質の心的單獨態に對しては當然その條件的先行者(異時的存立者)たる外ないものであつて(或はそれを同時的と考へる場合には、その感覺的性質の心的單獨態といふもの自身がもはや決して現實的ではあり得ずして却つて唯想像的に間接的なものである外なく、つまりそれはそのままにはその感覺的性質への眞の直接者であり得ないのである)、決してそのままその感覺的性質と全く同時的な所謂窮極的直接者たる意味に於ける物的事象「自體」ではあり得ないのである。たとひ(心的物的兩)變化の相應性の精密化に向つて如何程追究を進めたにせよ、何らかの經驗的具體性に於いて外界的に成り立つ限りの生理的物的事象に關しては、事情は原理的にあくまで同様と考へられる。かくて、我々が自然的に感覺的性質そのものに關しても亦やはり何らかの空間的形象に於いて所謂物的基礎をば想像しようとするといふことは、實はその感覺的性質の變化(といふ時間的關係)の行動的規制に關する條件的先行者としてそれ自身別に何らかの感覺的性質の存立を既に豫想して成立つところの一種の經驗的具體的物的事象といふものと、感覺的性質そのものに對して決して條件的に先行するのではなく却つて嚴密に同時的な而も經驗的空間的形象をもつてそれに擬する

この不合理な一種の物的事象に關する所謂自體として考へられてゐるところのものとの間の、明白な原理的差別をば、經驗的自然的立場からの一種の惰性的傾向に於いて無視しようとするのであるといふことが先づ考へられるのである。

而も、感覺的心的内容に對して眞に直接する意味に於けるその自體的な所謂物的窮極態が、もはやそれを何らかの外界的經驗的な具體性に於いて想像することを許さないものであり、従つて又、感覺的心的内容の變化に對して、それを行動的に（條件的物的事象への外界的な干渉により）反覆實現してみせることの可能なる意味に於ける右の所謂説明に役立つものでもないのであるとするならば、即ちそこに既にそのやうに通常の所謂物的基礎乃至背後者としての説明的意義がもはや見出せないのであるとするならば、それは一體いかなる意味に於いてその存立が想定されなければならぬのであらうか。

その事を先づ、經驗的に一種の外界的物的事象を扱ふ限りに於ける狹義の生理學の立場から考へてみるのに、そこに所謂大脳皮質的な神經過程といふものについてその（可能的な）經驗的具體相の底に或る超經驗的な「自體」が考へられなければならぬといふことは、一般に他の物的科學の對象に於ける場合と根本的に事情の異なることなく、要するにそこに經驗的「現象」への無限の可能性が藏されてゐるといふことに過ぎないのである。唯、一般に外界的物的事象に關する科學の場合にあつては、所謂經驗的現象への身體的條件といふものに對する正面的な顧慮が通常缺如するか、少くも比較的稀薄であり（斜視的に扱はれ「消去」的間接化が試みられる）、従つて物の自體的所謂無限性も結局經驗的現象と根本的に同様な形式に於いて考へられ、唯關係の連帶性が考慮せられる所、經驗的に有限なる限りの

「現象」的把握の原理的な蓋然性が冥々に意識せられるといふことのあるに止る傾向のあるのに對して、少くも或る程度に心理學的考察を含む限りに於ける生理學の場合にあつては（自然的には知らず）當然外界的物的事象一般の經驗的知識に與る身體的條件といふものが忘却せらるべきでなく、特に所謂大脳皮質的神經過程に關しては、その外界的經驗的現象態といふもの自身直ちに或る大脳皮質的神經過程といふものを別に豫想して成り立つてゐるのである意味に於いて、その現象様式をそのままその所謂自體にまでも及ぼすといふことには當然或る撞着が感ぜられなければならぬ筈であり、——その點に聊か差違が考へられるばかりである。従つてこの立場から云へば、所謂自體の想定は結局あくまで消極的保留的である外なく、つまり大脳皮質的神經過程といふものは一種の外界的物的事象としては經驗的現實的把握にとつて到底汲み盡せない深い底をもつが差當り唯それだけの事に止まり、感覺的心的内容との眞の直接的關係に於いて考へられるその深い底なる所謂物的窮極態そのものの本質如何に關してはそこに積極的に明かな何も無く、唯そのあらゆる特定の具體的規定に對する或る否定の存するばかりである。

他面に於いて翻つて感覺的内容そのものについて純心理學的な考察の立場から云ふならば、それはその眞の（心的）直接態に關する限りその所謂外化乃至物化に於ける不充足態（他の可能的内容への意味的指示）とは反對にそれ自身としてあくまで充實したものであり、別に背後の間接的なる何らかの物を自身の説明原理として要求するといふことなく、謂はばそれは自身で自身を説明してゐるものである。實はその意味に於ける端的な現前的充實性（自體的現前性）にこそ、廣く所謂心的なるものの根本性格は存すると考へられるのである。即ち何らかの感覺的性質は他の可能的性質への無限の指示を含むことに於いてでなく、端的にそれ自身としてはじめて一箇的心的内容であり、所謂外



化乃至物化に於ける感覺的性質について何らかの間接的背後なる者の必至であるのと反對に、眞に所謂心的な感覺的性質そのものは却つてそれ自身端端の出發の基礎たるべきものとして所謂物的間接者乃至背後者の經驗的具體相の如きがすべてそれによつてはじめて成る所のものなのである（物理學がその觀測に關する生理學的事情を別に考慮しないといふ上に述べられた一應の不合理感も實は身體的事情の生理學的考察そのものがやはり或る端的な感覺的相異性を以て差當りその出發點とする外ないといふ、この事情から一先づ考へ直されてくるわけであると思はれる）。

私は以上の如き事情を照らし合はせて、生理學的外界的經驗の立場からは到底達し得られないと考へられる或る大脳皮質的過程の所謂自體が、何らかの心的に直接的內在的な感覺的性質そのものこそ實は夫なのである、といふ考へ方は如何かと思ふに至つた次第である。云ひ換へるならば、感覺的性質そのもの（心的直接態）と或る大脳皮質的過程の外界的被經驗態との間に、後者の所謂現象たるに對する實在的な自體といふものをば、その窮極態に就いてまであくまで物的なる或るものとして前者の心的現前態とは截然と區別しつつ、考へることを止めるべきでないかといふのである。それは何故であるかと云ふに、上來考へ來つて明らかかなやうに、物の所謂自體的な窮極態についてまで、本來の經驗的素性から當然經驗に關して以外意味を成し得ない所の何らかの外界的規定を考へ及ぼすといふことは原理的に不合理なことであり、而して外界的空間的規定がそこにそのやうにして否定せられる限り、所謂心的内容の非空間性に對してそれがあくまで所謂物的として區別されなければならない理由はもはや存しないのであるからである。而も、外界的に彼方へ超越するものとしての何らかの物に向ふ經驗的知識は、その現實性に於いて物の所謂自體に關しあくまで意味的指示の關係に於ける間接態であり、從つてその自體への眞の到達は當然そのやうな（知識的）間接

性の消失であるべきであると考へられるが、感覺的性質そのものがまさにそのやうな自體的知識（自體的積極的顯現）といふにふさはしい性格をもつてゐることは既に右に述べられた如くであるのである。

普通に經驗せられる外界物が、總べて私の身體を通じ、私の身體的行動と關係的に成り立つ所の或る知識（直接的內容の或る秩序附け）に於いて、成り立つてゐるのであることは明白である。私の身體そのものとても、外界的に經驗的な一物として見られる限りに於いて、やはり同様である。然るに、それら經驗的外界物を意味的關係的に成り立たしめてゐる所のものたる何らかの感覺的性質そのものに即しては、そこにもはや斷じて私の身體を通じてではない所の或る端的な直接的知識があるのである。それは單純にそれ自身として（心的に）は內的にあくまで充實したものであつて、別に物を指示しない。唯、その出現や變様が或る種の外界的身體的事象と特に密接な時間的關係をもつ意味に於いて、それは確かにその身體的事象に關して居り、云ひ得べくんばその身體的事象の或る知識（感受）である。とは云へ、普通に物の知識と云へば、そこに知られる物自身は、あくまでその知識とは別に、考へられるのであるけれども、この場合にあつてはもはやそのやうな區別は成り立たないのであつて、知られるものとしての右の一種の身體的事象をば——この場合當然その超經驗的な「自體」に關してゐるのであるのにも拘らず——あくまで何らかの空間的形象に於いて想像しつつ、その或る（直接的）知識としての右の感覺的性質そのものから——その心的なるに對しあくまで物的として——區別して考へるといふことは、實は身體を通じてはじめて外界的に空間的なる所の通常の經驗界に於ける、物とその知識とに關する事情をば、もはや身體の介在の考へられない所謂直接知の範圍にま

で、そのまま惰性的に延長して行くことであつて、許せないのである。そこには、右の一種の身體的事象（の自體）が、それ自身空間的に物的なる或るものとして、その知識たるものの彼岸に區別せられつつ、知られてゐるのではなく、却つて直ちにその自體の端の現前そのものが考へられなければならぬのである。云ひ換へれば、知られるものとその知との區別が、この場合にはもはや意味を失ふと考へられるのである。

併し乍ら、經驗的に一種の物的事象として明らかに空間性をもつて存立する所の或る身體的過程について、たとひ外界の經驗的把握の届かないその極所に於いてもせよ、その所謂自體として却つて非空間的な或るものとして一種の心的内容を考へるといふことに對しては、確かに何か異様な感じを免れ難いやうにも思はれる。空間的に明らかに規定せられた形をもち位置をもつものが、經驗的追究を越える彼方に於いてとは云へ結局却つて非空間的であるといふことは、一種の矛盾であるやうにも考へられ理解し難いやうに思はれる。併し乍らこれは——度々云ふことであるが——明らかに空間といふものを存在的に絶對化し、元來感覺的性質の時間的關係（これこそが根本的事實である）の或る組織に外ならぬその意味的存立態に於いて、つまりそれを動的にその本來の經驗的由來の具體相に還元しつつ考へることを忘れてゐる所の立場に於いてのみ、そのやうな理解の困難があるに過ぎないことが氣附かれるのである。

併し又、普通に經驗的外界物の存在とは何を意味するかと云へば、それは上にも述べた通り、感覺的性質の或る無限的な約束がそこに或る安定的統一に於いてあるといふことである。所謂大脳皮質なる身體部分の存在として勿論その例に洩れない。然るにこの物の（或る部分に關する）所謂自體に就いて、一種の心的直接態として當然なる如く刻々個

性的に變易的なるものとしての或る感覺的性質が考へられるといふことは矛盾ではなからうか。——この疑問に對しては、總じて經驗的外界物の存立が、生の心的直接態に關する(行動的意欲と關係的なる限りに於ける)或る合理化に外ならず、心的内容の或る無限的統一としてのその所謂安定的な同一性といふものが、實はそれらの心的内容についての仔細な個別性を無視する意味に於ける或る高度の(實用的)抽象性に基いてゐるのであるに過ぎないことが考へられなければならぬ。嚴密に具體的に見る限り、實は瞬時も安定的な同一性といふものは内容的にどこにも存在してゐないのである。

併し尙、かくては結局、世界は擧げて心的内容のみとなつて漂蕩出沒し、所謂物的實在の核的實質的に重量ある安定的存在は、もはやどこにもその存立の餘地を見出せないことなるのであらうか。——この心配は全く無用である。世界は現にあくまで豊富にその意味に於ける物を含んで居り、所謂實在論者若しくは更に所謂唯物論者の考へると同じ意味に於いてさへ、物の存在がまさに疑ふべくも無い事實であると云つてよい。之を否定するものは、それが事實に反し非眞理である故を以て、端的に無視せられてよい。唯哲學は、科學をも含む自然的立場に於いてよりも、事態を更に一層具體的に考へ、更に一層忠實に——考察の立場乃至要素の一貫性をあくまで保持しつつ(徹底的認識へのこの事柄のもつ意義は明白である)——記述してゐるだけである。云ひ換へれば、物は確かにあくまで實質的に存在する——唯、それをさう考へさう云つただけで済ますのと、その思考乃至表白の意味を一層具體的に考へ詰めて見、そこに結局「物の存在」が實は生の或る複雑な直接的事態に關する表現(外的並びに内的な)上の或る要約であり省略記號であることを意識するのとの差があるばかりである。

以上の事態についてもう一度別の云ひ方をしてみるならば、感覺的性質にとつてはつまり、その「彼方」に考へられる物と、その此方に考へられる物と、あるわけである。例へば或る白の視覺的性質について、一片の紙片といふは前者であり、その時の或る神經過程といふは後者である。而してこの二者の、その感覺的性質に對する關係は、明らかに異つて居り、前者はその感覺的性質が他の無數の可能的感覺への約束を含む所(所謂外化乃至物化)に成り立つてゐるのであるのに反し、後者の場合その感覺的性質そのものに即してもの或る直接知が考へられるのである。勿論所謂神經過程に關しては、それを前者とひとしく「彼方」に考へる(間接知の)立場もあるにはあるのであるけれども、その時は又その時の或る神經過程についてやはり「此方」の性格が成り立たねばならぬのである。而も、そのやうにしてあくまで「此方」なるものを、結局やはり一種の空間的性格に於ける物として、心的に非空間的な感覺的性質そのものからあくまで區別しつつ考へようとするといふことは、畢竟それを「彼方」に考へる立場からの單なる惰性的影響であるに過ぎないといふことが考へられる。即ち、「彼方」に扱はれる神經過程は、その同一の立場からは到底汲み盡せない深い可能性をもつが、その不可到達的な窮極態があくまで空間的に物的な形に於いて想像されるといふことは、畢竟その同一の立場からする思考習慣の單なる非合理的延長であるに過ぎないのである。而も通常の「彼方」なる物については、單にそこに汲み盡せない奥底の(具體的規定に對して否定的保留的に)意識せられるといふことのあるに止まるのに、私の身體といふものについての經驗は、「彼方」なる物として追究せられるその或る種の過程の窮極に、或る感覺的性質の心的現前を直證するのである。而もこの心的現前者について、それを或る身體過

程の窮極態に關する一種の直接的知識として考へつつ、その所謂知識から知識せられるものとしての或るものをばあくまで空間的に物的な形に於いて（背後の間接的に）區別して考へるといふことは、畢竟右に述べた如く、實は通常の外界の經驗的立場の暗黙の移入であるに過ぎない。かくてこの窮極所に於いては結局所謂知識と知識せられるものとの或る合一が考へられなければならないのであつて、感覺的性質はそのものとして（直接感受態に即して）正にさういふものなのである。而もそのやうな感覺的性質そのものは、或る身體的物的過程を外界的に所謂「彼方」に扱ふ所の立場に關して云ふ限り、そこにその物的事象の所謂自體が現實に到達し難いと同じ意味に於いて、それ自身決して現實化することなく、畢竟單に想像せられるに止るか、さもなくば右の立場の一應の廢棄乃至中絶に於ける、所謂生の反省の一轉を介してはじめてその現實態に入るか、何れかであるより外はない。云ひ換へれば、そこには正に實在界と現象界といふにも相應はしい生の本根的な階層的差別が嚴存するのである。而も又、感覺的性質がそのものとしてその端的な「かくある」につき、謂はば自身で自身を説明してゐるものであるといふことは、感覺的性質の變化への合理化の意味に於いて考へられる所の或る身體的物的事象について、その所謂自體への追究が畢竟或る當體的（間接的指示的と反對な）知識を目指してゐるといふことと、正に相應すると考へられる。——このやうな事情に於いて私は、或る特種の身體的物的事象に關する所謂自體が、畢竟或る感覺的性質の心的直接態こそ實はそれなのであるといふ風に考へようとする次第である。

併し乍ら尙考へてみるのに、外界的に空間的な或るものとしてそれ自身無數の感覺的性質（間の或る關係）に於いて成り立つてゐるのである所の或る身體的物的事象が、その所謂自體としての窮極態に於いて却つて或る單獨の感覺的性質であるといふことは何か異様であるやうにも思はれる。併し乍らそのやうに一方に多であると共に他方に一

であるといふ事柄が若し全く同一の立場で云はれるのであるとするならば、それはいかにも明らかな矛盾であるでもあらうが、經驗的に物を外界の間接的に考へる立場と、或る感覺的性質の心的に直接的な自體的現前態との間には、實は生の最も根本的な斷層が、最も深刻な罅隙が、介在するのである。即ち、私が現に心的内在的に或る感覺を體驗してゐる時、私の身體といふものに就いては外界的に或る物的事象が經驗せられるといふ——この事柄については、その両面を全く同時的と考へる場合、所謂外界的物的經驗たる暗に「他の私」(可能的意識)といふものの想定(次の次の節参照)に於ける一種の想像態である外なく、反對に若しその外界的經驗が「他の身體」といふものに關して(現實的であるならば、却つて所謂心的に内在的な感覺的體驗そのものが一種の想像態である外なく、又若し兩者をひとしく現實的であらしめる場合、それらは必ずや反省的に繼起の關係に立つものでなければならず——要するにそこには、同時的な異つた私の間若しくは繼時的な瞬間と瞬間との間の關係が含まれてゐるのであつて、同時的な異つた私の間の關係といふものも、一層具體的にはやはり同一の私に於ける或る現實(直接)態と非現實(間接)態との間の關係として、畢竟或る瞬間と瞬間との間の(反省的連結)關係に歸着するといふことが出来、これこそ實はその端的な措定の絶對的な非合理感に於いて、哲學が古くそこに「神」の直接的な働きを考へたところのものに外ならぬのである。云ひ換へれば、外界的に追究せられる限りの或る身體的物的事象について、その物的事象の所謂自體がその追究の立場に立つ限り結局不可到達的であるといふこと(可能性の無限の底があるといふこと)、その立場と窮極的に連なりながら而も斷然相違する別の立場に於いて存立する或る感覺的性質の心的現前態と右の物的立場との間の關係が結局具體的には不明であるといふこと(或る端的な飛躍があるといふこと)、更には、生に於ける次の或は又の瞬間乃至内容(あるもの)の端的に積極的な措定といふこと、これらの一見別々の事柄が、——その核心に於いて實は一なのである。(未完)